不思議な植物

見たこともない植物から多肉植物・サボテンまで、
一風変わった不思議な植物49種が勢ぞろい。

EDING
CORPORATION

セコイアデンドロンの大樹。

1 大きい植物

歴史の証人は静かに語る。

バオバブ、シャーマン将軍の木、ブリッスルコーンパイン、ヤレータ…。想像を絶するほどの長い年月を生き永らえてきた植物に惹かれるのはなぜだろう。
それは身近な存在のはずの“植物”が、自分の想像さえ及ばない遥か昔の地球の歴史を知っているから。良い時代も悪い時代もひっそりと黙って地球を見続けてきた植物たち。極限の環境で生き抜くために、目を見張るような進化を遂げてきた植物たち。そんな植物を知ることで、私たちが学べることはきっとたくさんある。

01

-Amazon water lily-

オオオニバス

世界最大級の熱帯性湿地であるパンタナルに浮かぶ無数のオオオニバス。

オオオニバスの葉の裏は赤茶色で、鋭利なトゲが無数に生えている。

ヴィクトリア女王の名を冠した巨大水生植物

スイレン科のなかで最も巨大なオオオニバスは、アマゾン川流域やパラグアイ、アルゼンチンに自生する水生植物だ。

子どもが上に乗っても沈まないほど浮力が大きいことで知られているが、その秘密は葉に張り巡らされている太い葉脈にある。この頑丈な葉脈が、巨大な葉の重さを分散し、その巨体を水面に浮かせているのだ。

オオオニバスの一番の特徴でもある葉は、生態系を育む場になっている。アマゾンでは、小魚などが大きな葉を隠れ蓑（みの）として利用し、それを狙って大きな魚がやってくる。さらに葉の上では、その魚を食べようと鳥たちが待ち構えているのだ。このように多種多様な生き物を育んでいるオオオニバスは、いろいろな意味で大きな存在といえる。

◆名称…オオオニバス
◆学名…Victoria amazonica
◆分類…スイレン科オオオニバス属
◆サイズ…最大で直径3m、縁の高さは10～15cm
◆原産地…ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン

03

-Titan arum-

スマトラオオコンニャク

満開のスマトラオオコンニャク

世界一大きくて滅多に咲かない臭い花

7年に1度、2日程しか咲かない世界最大の花であるスマトラオオコンニャク。花の形がろうそくを立てた燭台（しょくだい）に似ていることから、ショクダイオオコンニャクとも呼ばれる。非常に希少な植物であると同時に、「死体花」と呼ばれるほど、開花時に腐った肉や魚のような臭気を放つことでも有名だ。

「世界一大きな花は何か？」という話題になると、決まってスマトラオオコンニャクとラフレシアの名が挙がるが、いずれも世界一だとギネス世界記録に登録されている。その理由は、〝花〟と〝花序（かじょ）〟の違いにある。花序とは、小さな花が集団で咲いているものを指し、スマトラオオコンニャクの花もこの花序にあたる。そのため、花序としてはスマトラオオコンニャクが世界一なのだ。

左／ひだ状になった仏炎苞（ぶつえんほう）が見事だ。右／開花初期のスマトラオオコンニャクの様子。

◆名称…スマトラオオコンニャク、ショクダイオオコンニャク
◆学名…Amorphophallus titanum
◆分類…サトイモ科コンニャク属
◆サイズ…大きいもので花序の高さ約3m、直径約1m
◆原産地…インドネシア・スマトラ島の熱帯雨林

08

-Rafflesia-

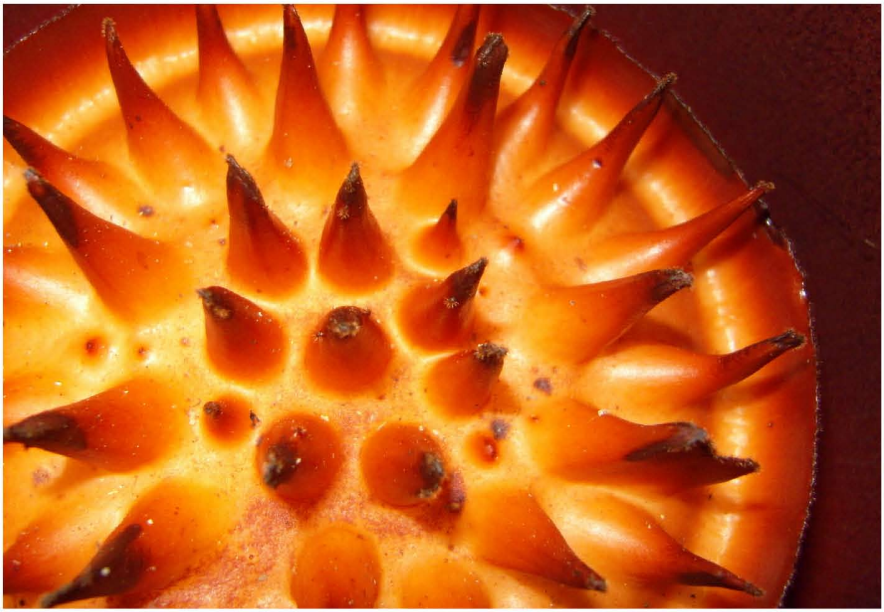
ラフレシア

開花してから3日目が見頃で、5日目には黒ずんだ色に変色し枯れてしまう。

世界一大きい完全に人任せな花

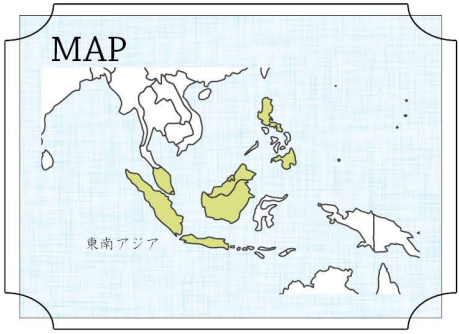
東南アジアの熱帯雨林に自生し、世界最大の花を持つラフレシア。葉緑素を持っておらず有機物を作る能力がないため、他の植物に寄生して水分や養分を奪って生きるという、完全寄生型の珍しい植物だ。ラフレシア属のなかでも、最も大きな花を咲かせるラフレシア・アーノルディが広く知られており、日本で「ラフレシア」という場合はたいていこの種を示す。

葉や茎はなく、赤い五弁花を寄生した植物に直接付ける。花の直径は小さいもので15センチ、大きいものだと1メートル近くにまで成長する。ラフレシアの開花時期は定まっておらず、つぼみから開花までの成長期間は個体によって異なるが、およそ9ヵ月程度といわれている。



上／花の内部には高さ3cm程の突起物がきれいに並んでいるが、その役割はいまだによくわかっていない。下／野生のラフレシアを見るのは非常に難しいという。

◆名称…ラフレシア
◆学名…Rafflesia arnoldii
◆分類…ラフレシア科ラフレシア属
◆サイズ…大きいもので花の直径1m
◆原産地…東南アジア島嶼（とうしょ）部、マレー半島



06

-Tumbleweed-

タンブルウィード

荒野のあちこちに点在するタンブルウィード。

◆名称…タンブルウィード
◆学名…Salsola tragus
◆分類…ヒユ科オカヒジキ属
◆サイズ…大きいものは直径1m以上
◆原産地…ロシアのウラル山脈

気ままに転がる荒野の旅人

西部劇でよく目にする、荒野をコロコロと転がる枯れ草のような丸い植物。直訳すると「回転草」という名前のタンブルウィードだ。アメリカとユーラシア大陸の一部に分布し、乾燥地や塩性地に生育することが多い。株はボール状に成長し、秋になり果実が成熟すると風によって茎が折れ、地面を転がっていく。この運動によって種子がまき散らされ、繁殖を繰り返しているのだ。

今や、アメリカ中西部の荒野といえばこのタンブルウィードがすぐに思い浮かぶほどに定着したが、もともとは19世紀にロシアから輸入した種子のなかに混ざって偶然持ち込まれた外来種だ。その強い繁殖力と天敵がいないという好条件から、爆発的に広まったと考えられている。

05

-Sore-mouth bush-

ソアマウス・ブッシュ

真っ赤な唇のような葉が印象的な植物。

◆名称…ソアマウス・ブッシュ
◆学名…Psychotria poeppigiana
◆分類…アカネ科ボチョウジ属
◆サイズ…高さ1m〜
◆原産地…中南米の熱帯地域など

ジャングルの奥にひそむセクシーな植物

緑の木々が生い茂るうっそうとしたジャングルのなかで、突如目に飛び込んでくる鮮やかな赤。「口内炎の木」という意味の名前を持つソアマウス・ブッシュだ。このほかにも、「ホットリップス（熱い唇）」や「キス・オブ・ジャングル（ジャングルのキス）」といったユニークな別名がある通り、植物なのに真っ赤な唇のような奇抜な見た目が特徴だ。

この唇に似た赤い部分は花ではなく葉で、赤い葉の中央から白または黄色の小さな花を咲かせる。そして最後に青い実を付けるという、目まぐるしく色を変える植物なのだ。この見た目のインパクトさからか、ブラジルのマラニョン州に住む部族たちは、狩りの際にお守りとして持っていくという。

02

-Starfruit-

スターフルーツ

熟すと果皮は緑から黄色になり、光沢が出てくる。

星の形をしたフルーツ

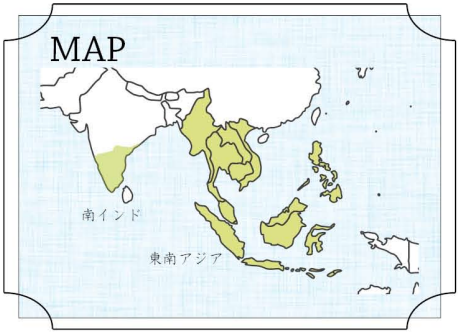
スターフルーツは和名を「ゴレンシ（五歛子）」という、南インドを中心に東南アジア全域を原産地とするトロピカルフルーツだ。現在は、中国南部や台湾、カリブ海周辺、アメリカのフロリダやハワイなどの熱帯～亜熱帯にかけて広く栽培されている。

和名も英名も、その由来は果実の横断面が五芒星形をしている点による。また、紀元前に書かれた中国最古の薬学書「神農本草経」には、現在のスターフルーツと考えられている「楊桃」の記述が残っている。

スターフルーツは、地域や品種により甘さが異なるため、「甘味種」と「酸味種」の2種に分けられている。熟して柔らかくなると風味がなくなってしまうので、少し固さがあるうちに食べると、爽やかな風味と共にサクサクとした食感も楽しめる。

上／輪切りにすると、果実の断面が星の形をしているのがよく分かる。下／たわわに実ったスターフルーツ。実生（みしょう）から5〜6年で実を付けるようになる。

◆名称…スターフルーツ、ゴレンシ（五歛子）
◆学名…Averrhoa carambola
◆分類…カタバミ科ゴレンシ属
◆サイズ…果実の大きさは5〜15cm
◆原産地…南インド、東南アジア



01

-Artichoke-

アーティチョーク

肉厚な萼(がく)に守られるようにして花を咲かす。

ほころび始めているつぼみ。鮮やかな紫色が美しい。

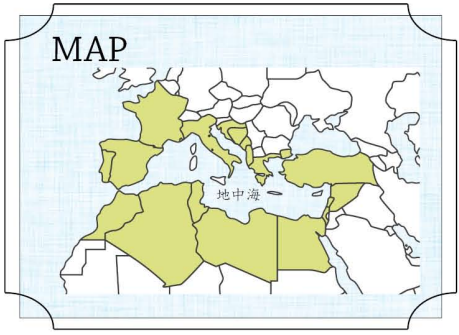
欧米では一般的な野菜

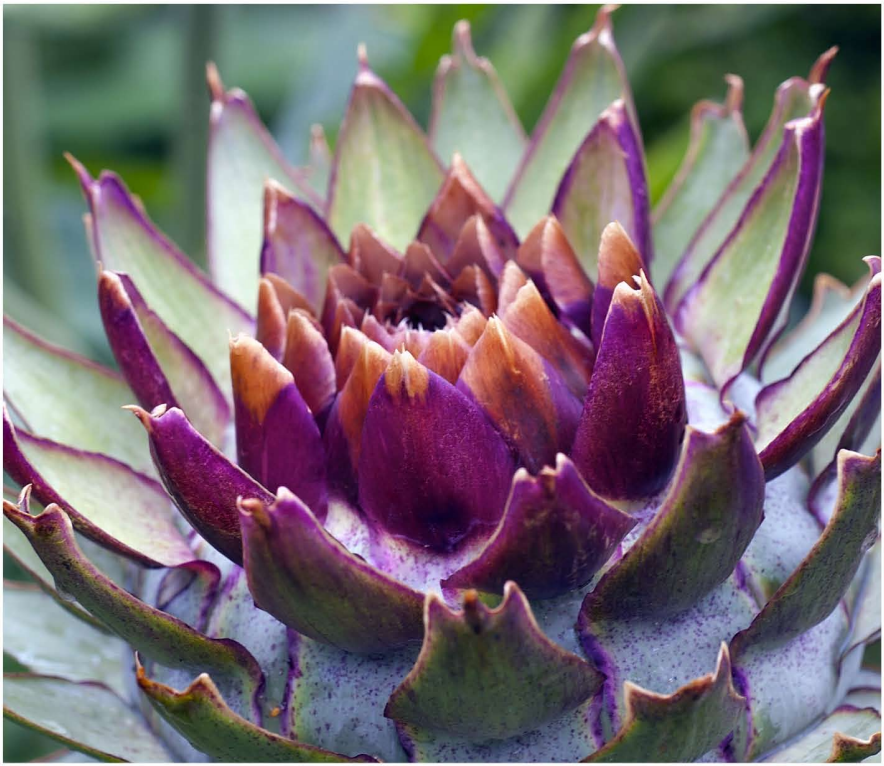
地中海沿岸を原産とするアーティチョークは、古代から栽培されてきたキク科の多年草。つぼみの状態の造形が美しく、アザミに似た大ぶりの紅紫色の花を咲かせる。

「カルドン」という野生の大アザミが原種といわれており、15世紀ごろイタリアで改良されて以降、盛んに栽培されるようになった。和名は「チョウセンアザミ」だが、日本には江戸時代にオランダから渡来したため、名前の由来ははっきりとしていない。

日本ではあまりなじみがないが、欧米ではポピュラーな野菜として親しまれている。食用とするには、つぼみを茹でるか蒸すかし、肉厚な萼（がく）やつぼみの芯にあたる部分を食べる。日本でも江戸時代に食用目的で栽培された記録が残っているが、あまり広まらなかったようだ。

◆名称…アーティチョーク、チョウセンアザミ（朝鮮薊）
◆学名…Cynara scolymus
◆分類…キク科チョウセンアザミ属
◆サイズ…高さ1.5～2m
◆原産地…地中海沿岸





上／穂先が開きだしたアーティチョーク。萼（がく）が花びらのように見える。下左／「アーティチョーク・ハート」と呼ばれる肉厚なつぼみの中心部は、焼くとホクホクし、食感はさつまいもやじゃがいもに似ている。イタリア料理では前菜に使われることが多い。下右／アザミにそっくりな花を咲かせるアーティチョーク。

08

-Romanesco broccoli-

ロマネスコ

味はブロッコリーに近く食感はカリフラワーに似ている。

幾何学的な美しさを持つロマネスコ。流通数は多くないものの、日本でも生産されている。

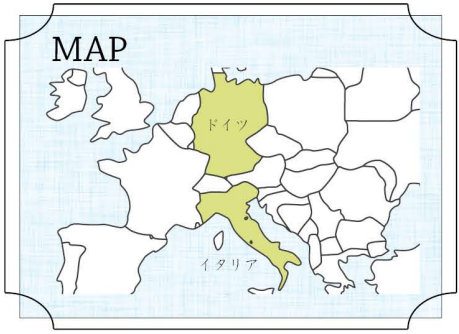
フラクタルが見事な野菜

ロマネスコは、フラクタル構造（図形全体と一部が相似している状態）の花蕾（からい）が見事なカリフラワーの一種。ロマネスコという日本での呼び名は、イタリア名の「ブロッコロ・ロマネスコ」に由来する。

16世紀のローマ近郊でブロッコリーとカリフラワーをかけ合わせて開発されたとされているが、ドイツでも同時期から栽培されていたという記録が残っていたりと、その歴史は諸説ありはっきりとしていない。

最大の特徴である花蕾は、幾何学的な配置を成し、個々の蕾（つぼみ）が規則正しくらせんを描いている。この蕾はさらにそれ自体がらせんを描いて並び、これが数回繰り返されて自己相似の様相を呈す（＝フラクタル）。この形状が人気となったロマネスコだが、美しいフラクタルを作るのは難しいという。

◆名称…ロマネスコ
◆学名…Brassica oleracea
◆分類…アブラナ科アブラナ属
◆サイズ…花蕾の直径は15～20cm
◆原産地…イタリア、ドイツなど諸説あり



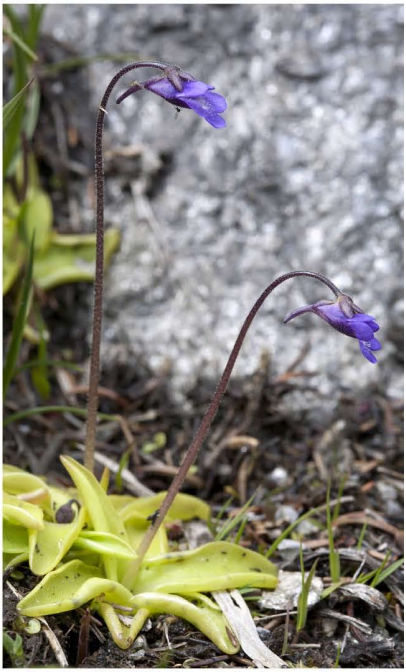
＜ COLUMN ＞

食虫植物

湿地に生育するモウセンゴケ。

植物なのに、虫を食べる食虫植物。虫をおびき寄せ、捕まえて自らの養分にしてしまうと聞くと少し恐ろしいようにも思えるが、小さな植物が虫を捕らえるために一生懸命に工夫し、進化した姿かたちはほかの植物にはない魅力がある。

食虫植物とは、「食虫」という習性を持っている被子植物の総称のこと。食肉植物、肉食植物と呼ばれる場合もある。食虫植物は「虫を捕食する植物」ではあるが、虫だけを食べてエネルギーを得ているわけでない。基本的には光合成能力も備えており、自ら栄養分を合成して生育する能力を保持している。



スミレに似た花を持つムシトリスミレ。

落とし穴式の捕虫器を持つサラセニア。

捕虫器官にはいくつか種類がある。例えば、葉や茎に粘毛や粘液腺を持つ植物、花に仕掛けがあり、入り込んだ虫を閉じ込める植物、落とし穴のように虫が落ちてくるのをひたすら待つ植物など、実にさまざまだ。しかし、基本的には虫を捕まえるだけでなく、消化液を分泌し、吸収する仕組みを備えていなければ食虫植物とは認められない。つまり、捕虫器官で昆虫を捕らえ、殺して分解し、そこから何らかの栄養分を得る植物のことを示すのだ。食虫植物の多くは痩せた土地に生息しているので、不足する養分を捕虫によって補っていると考えられている。

07

-Jelly bean plant-

ニジノタマ

徐々に赤く色付き始めている。

秋になりさまざまな色に紅葉するニジノタマ。

葉の先端を真っ赤に染めたセダムの仲間

先端にかけて膨らむぽってりとした葉をたわわに付けた、ニジノタマ（虹の玉）。４００種以上がほぼ世界中に分布するセダムの仲間だ。「セダム」とは、ラテン語で「座る」「固定する」を意味する「セデス」を語源に持ち、岩壁に張り付くようにして自生する姿から名付けられたという。

ニジノタマは非常に丈夫で、葉の色が季節や環境によって変化するという特徴から、観賞用としての人気が高い。成長期の春～夏にかけてはツヤツヤとした緑の葉をしているが、気温が下がる秋になると、葉先から徐々に褐色に近い赤色へと紅葉していく。

１年を通じて緑、黄、赤、オレンジなど、まさに虹のように複数の色の移り変わりを楽しむことができる植物だ。

◆名称…ニジノタマ（虹の玉）
◆学名…Sedum rubrotinctum
◆分類…ベンケイソウ科セダム属
◆サイズ…高さ10～15cm
◆原産地…メキシコ

-Ruby ball cactus-

ヒボタン

05

台木のサボテンに鮮やかな緑のものを選ぶと、ヒボタンの色がよりいっそう映え、美しく見える。

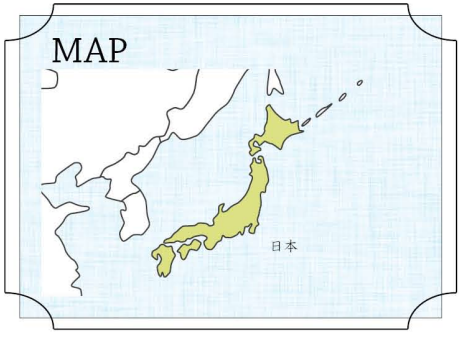
鮮やかな赤が特徴のヒボタン。

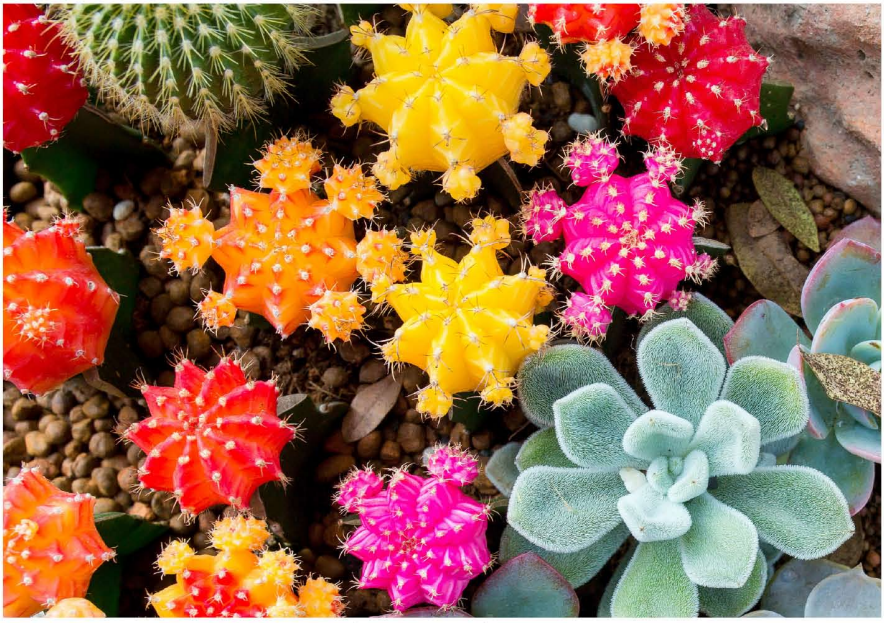
玉座に鎮座する「赤い宝石」

ヒボタン（緋牡丹）は、パラグアイ原産のボタンギョク（牡丹玉）を改良して造られた園芸品種。丸く真っ赤なサボテンが、まるで冠のようにちょこんと乗っている様子から、「赤い宝石」とも称される人気の品種だ。葉緑素をまったく持たないため、全体が赤やピンク、オレンジ色をしており、台木に接ぎ木をして育てる。

台木には、主にドラゴンフルーツを実らせる三角柱などの柱サボテンが使われることが多い。光合成ができないため、自力で成長する力をほとんど持っておらず、成長の度合いは台木にすべて委ねているといっても過言ではない。しかし成長は早く、盛んに芽吹いて群生していく。花は淡いピンク色で、株が4センチ程度まで成長すると、蕾（つぼみ）を付けるようになる。

◆名称…ヒボタン（緋牡丹）
◆学名…Gymnocalycium mihanovichii
◆分類…サボテン科ギムノカリキウム属
◆サイズ…高さ8～10cm
◆原産地…日本





上／赤だけではなく、黄色やオレンジなど、さまざまな色があるのは品種改良のたまもので、園芸品種ならではだ。下／親株から芽吹いた子株は非常に成長が早くどんどんと増えていき、最終的には親株が見えなくなるほど大きくなる場合もあるという。

不思議な植物

2015年4月20日　version1.0発行

ISBN978-4-902896-07-7

著作　株式会社 エディング
編集　小島優貴、多田あゆみ
デザイン　小島優貴
写真　Shutterstock

発行人　武井誠

発行　株式会社 エディング
〒162-0811　東京都新宿区水道町2-14 柴木ビル2F

【お問い合わせ】 eding@eding.co.jp

©Eding Corporation 2015
本書の無断転載、複製、頒布、公衆送信、翻訳、翻案等を禁じます。
一部または全部をアナログ化することは、個人や家庭内の利用でも著作権法により認められておりません。

エディングの書籍についての新刊情報・詳細情報は、以下をご覧ください。
http://www.eding.co.jp/